

トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブの諸仮説

広田康生¹

Hypotheses of Transnational Community Perspective

HIROTA, Yasuo¹

要旨：本論は、「トランスナショナル・コミュニティ」概念を研究枠組みとして、日本社会の移動の磁場に形成される多文化、多民族コミュニティ及び海外における日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムを研究する際の諸前提、諸仮説を考察する。

現在の国際移動は、移動の「磁場」ないしは「結節点」となる「場所」を起点に、否応なしに社会の多文化化、多民族化を進行させている。移動の拠点となる「場所」と「場所」の間にはそれらを結ぶ越境のネットワークを成立させると同時に当該社会における越境の「磁場」には、多民族同士の接触、「場所」や空間を求める競争、当該国家からの「同化」や「統合」の政治過程と共生の圧力、そして時に共存の諸過程が交錯する状況をひきおこす。筆者は別稿において、「トランスナショナリズムと場所の政治」と題して移動の拠点としての地域に展開する「共生」の政治的ロジックとそれに対する「エスニシティ」の動向についての調査研究を行い、「越境の都市的世界と場所への繋がり、場所の獲得」と題して日本人の初期トランスナショナリズムの展開のなかに、国際移動をする人々の「場所」の獲得とコミュニティ形成の過程を見てきた。そして、こうした調査研究の文脈と位置付けを行う目的で「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所への都市社会学的接近」と題して、都市社会学の立場から接近する際の意義と意味の考察を試みたが、本稿はこうした諸研究に続けて、「トランスナショナリズム」の展開を具体的な「場所」に立脚しながら研究する研究枠組みとしての「トランスナショナル・コミュニティ」概念に含まれる諸仮説について都市社会学的に考察する。この過程をとおして、上記の研究を進める上での理論的課題や論点、そして都市社会学的意味を検討する。

キーワード：トランスナショナル・コミュニティ、都市推移空間、場所の獲得

1. 問題の所在—移民政策研究と都市社会学的トランスナショナリズム論の現在

移民と国家、トランスナショナリズムと国家に関する、日本発の注目すべき研究が続々と出現している（久保山 2005, 2010；小井土 2008；近藤・塩原・鈴木 2008；権 2011）。

これらの研究の特徴は、グローバリゼーション、トランスナショナリズムの国家に及ぼす影響を「統合」の問題としてとらえ、その「統合」問題の中心としての移民政策の変遷に焦点をあわせながら、移民が提起する社会的問題と近代国家が抱える矛盾を論じている点にある。確かに現在のトランスナショナルな人々の移動は、国家

レベルでは「多様性と統合」という問題をもたらしている。そしてこの「多様性と統合」に関する当該国家の原理は移民政策に象徴的に表れる。

例えば久保山亮の一連の研究は、移民の国際移動が当該国家に提起する「多様性と統合」の問題が、ヨーロッパでは1990年代末の移民政策の劇的な変化として展開していること、それがグローバル化へ対応しようとする国内の政治、経済、社会体制の変化と結びつつ展開したことを具体的かつ詳細に論じている。久保山によれば、その変化とは、90年代以前の「一律にイミグレーションを制限しようとする政策」から、90年代末から出現する、国際競争力強化の観点から能力や業績のある移民を受け入れ、リスクの高い移民を抑える「選別的移民政策」への転換として押さえられる。久保山は、ドイツとイギリスの場合を事例に取りつつ、そうした転換がグローバル化への対応としての「福祉国家」から「競争国家」へのシフトという国家モデルの転位を背景にしていることを指摘している。

受稿日2013年1月17日 受理日2013年1月29日

* 本研究は、文部科学省科学研究費「基盤研究 (C)」[日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所] (課題番号：22530569)：平成22—24年度)の助成を受けている。

¹ 専修大学人間科学部社会学科 (Department of Sociology, Senshu University)

久保山の分析が興味深いのは、そうした国家モデルの転位が、「イミグレーションの象徴的政治化」の過程の変化をとおして実現された、と指摘している点である。すなわち、1990年代以前に行われてきた「機能不全の政治的責任」を移民の存在に結びつける政治社会的なメカニズムが、グローバル化への対応のなかで、リスクやコストから資源や能力を重視する移民の「統合」政策へと変化する過程として分析している。この指摘は、現代の移民・国家・アイデンティティを見る上で極めて重要なポイントを呈示している。

もう一つ注目すべき研究として権香淑の研究がある(権 2011)。権香淑の研究の特徴は、現在日本にも多数(約5万人といわれる)来住している中国朝鮮族(吉林省延辺を中心に、遼寧省、黒竜江省出身の朝鮮族を指す)の、韓国、ロシア、日本、中国への移動がひきおこす社会的、政治的な問題と、独自のコミュニティ形成の実態を研究することで、アジアにおけるグローバル化、トランスナショナリズムの展開が提起する課題を明らかにしようとしている点にある。権は、上記のように本来の出自が朝鮮でありながら国籍が中国籍である中国朝鮮族——この意味で彼らはインビジブルな存在でもある——に焦点をあわせ、彼らの中国沿海都市、韓国、ロシア、日本、アメリカ等への移動とそれがひきおこす朝鮮族村の過疎化、人材流出、朝鮮族学校の統廃合、家庭崩壊などの社会問題と、移動先の沿海都市や韓国、ロシア等を跨いで形成する「跨境生活圏」——トランスナショナリズム論で言う「越境の社会空間(トランスナショナル・ソーシャル・スペース)——と、「跨境人」の形成するネットワークを明らかにすることで、朝鮮族に対してなされた国家による「構造的暴力」や東アジアにおいて、国境を越えて「実質的に形成される」社会圏について明らかにしている。

こうした研究が筆者にとって示唆的なのは、移民現象を、国家と個人、社会構造と移動主体及び共振する人々を繋いで理解しようとする志向性が読み取れることである。例えば、中国朝鮮族の移動の原因について権は、新中国成立後の国家的な政策として朝鮮族への言語教育や民族政策に焦点を合わせ、それを社会構造的な暴力としてとらえる一方で、移動主体としての朝鮮族の文化的特性にも注目し、歴史的に、朝鮮半島北部及び中国東北部に地続きの「跨境生活圏」が形成されていたこと、そしてその「跨境生活圏」をたどるようにして近代国家成立以降も実際の移動が継続し、さらにそうした条件の上に、韓国社会の相対的な共同体規制の弱さも重なり各地

域ごとの伝統的規範とが相まって「移動の文化」が維持されてきたことを指摘している。上記の久保山の研究は、移民政策を介しながら、国家体制と移民個人の問題とを、具体的な言説の世界の展開(=「象徴政治」の展開)に焦点を合わせながら繋いで理解しようとしている。この二つの研究は、現在の移民研究、あるいはトランスナショナリズム研究を狭義の移民研究という限定的な研究領域から、社会全体の問題として扱おうとする昨今の移民研究の特徴を表している。

以上のような移民政策研究あるいは移民研究の展開に対して、都市社会学の立場からはどのような研究の展開があるか。無論、都市社会学的トランスナショナリズム研究に、移民政策研究の重要性を指摘する動きもでてくる(谷 2012)。だが、現在のトランスナショナルな移動が当該国家にもたらす「統合」の問題を、移動の「磁場」としての「場所」の変容を背景に、国家的政策とその政策からでは見えてこない個人のアイデンティティや生き方の問題を都市コミュニティと結びつけて論じる、現状にあわせた新たな都市社会学的研究枠組みの検討が手薄になっていることは否めない。

都市社会学からの移民、エスニシティ研究の一つの系としては、都市コミュニティ論、都市エスニシティ論を土台に「トランスナショナリズム論」に刺激を受けて展開してきた一連の研究の蓄積がある(広田 2003; 渡戸・広田・田嶋 2003; 奥田 2004; 藤原 2008; 奥田 2009; 田嶋 2010)。ここでの研究の一つの特徴として、都市コミュニティ論や都市エスニシティ論で展開してきた研究蓄積を土台に、既述のようにアメリカのトランスナショナリズム論からの示唆を相互参照しながら研究が展開したこと、その際、多かれ少なかれ移動の「磁場」(奥田の表現)としての特定の「場所」に研究の視座を置き、国家的な「統合」の問題を、地域コミュニティのレベルでの「共生」の問題と、移動主体の生き方やアイデンティティの在り方に焦点をあわせて明らかにしようとしてきた点が挙げられる。すなわち、移民、トランスナショナリズムによる移動者たちにコミュニティレベルで及ぼされる同化や統合の展開と圧力と、個人がどのようにその展開に対応し、時にずらし、乗り越えるかに焦点があてられた傾向がある。構造の研究だけでは見落としがちな、日常的な実践をとらえようとしてきた(広田 2006)。そして、こうした研究は、どこかに初期シカゴ学派の研究スタイルをしるばせているところに特徴がある。

無論、こうした伝統を踏まえて、現在問題となる国家

的な問題と個人を繋ごうとする新たな研究も出現し始めている。そうした試みの一つとして大倉健宏の研究を挙げておきたい（大倉 2012a, 2012b）。大倉の研究は、多文化、多民族化する地域の現状を、「エッジワイズなコミュニティ」—民族と民族、文化と文化が切っ先を突き合わせると同時にそこに何らかの制度が形成される緊張状況にあるコミュニティの様相を現した表現—と定義し、ここにおける諸個人の実践と全体社会の問題を、同コミュニティを「下から」支え繋ぎ合わせる制度、仕組み（＝「コーポレイティブ・チャンネル」）としての役割を果たす「宅建業者」の実践と「不動産市場」の実態解明に取組んだ研究である。大倉は、自らの研究の意義について、本研究の原点である奥田道大・田嶋淳子らの池袋、新宿調査に触れ、現在の新宿・池袋のトランスナショナルな状況を「新たな変化のはじまり」として捉え、「一定の生活実践及び職業的実践の集積を経験した」新来住者が、宅建市場において『下からの制度』をいかに構築したかを問う研究と位置づけ、本研究をシカゴ学派の研究特に「パーク及びバージェスの個人の主観性と客観的なものへの注目と、ヒューズによる制度への注目」を引き継ぐ研究としている。大倉の問題意識としては、移民やエスニシティをめぐる構造的な研究と構造研究からでは見えてこない主体の動き、そして日常性を深める、エスニック・コミュニティの提起する問題を、ミクロとマクロを繋ぐメゾ・レベルでの分析をとおして解明していこうとする姿勢がある。

以上の新しい研究の展開を背景にしたとき筆者は、無論、都市社会学において移民政策の研究の重要性を認めつつも、むしろ、これまでの蓄積に立ちつつ、今こそ、移動の「磁場」としての「場所」の変貌と「共生」の問題を手掛かりに、そこにどのような人と人との関係が生まれてきているのか、そして国家の移民政策がどのようにコミュニティの変貌をもたらすか、個人の生き方とぶつかりあうかに関する都市社会学独自の枠組み、方法論の展開に関する理論的検討が要請されていると感じる。

本稿では、こうした問題認識のもとに、トランスナショナルな移動をもたらす問題を、「トランスナショナル・コミュニティ」概念が提起する諸仮説の検討をとおして、都市社会学独自の枠組みの理論的考察をおこなうものである。

2. 「トランスナショナル・コミュニティ」概念の諸仮説

——都市社会学の立場からの理論的検討——

2.1 検討の意図と現在の文脈について

拙稿（広田 2012a）で示したように、筆者が本稿で取り上げる「トランスナショナル・コミュニティ」は、N. グリック・シラーらの定義を仮の定義として取り上げている。その定義とは「（“トランスナショナリズム”を）移民がその出身地（origin）と定住地（settlement）の社会を連結する、複雑に縺りあわされた社会関係を育み、そして維持する諸過程」と定義するもので、さらに「（こうした諸過程をトランスナショナリズムと呼ぶことによって）今日の多数の移民が、地理的、文化的、政治的な境界を跨いで形成する社会的な領域の存在」に注目する。そして、「多様な関係—家族的、経済的、社会的、組織間のそして宗教的、政治的な関係—を発展させ維持する移民たちを“トランスマイグラント”と呼び」、さらに付け加えれば、「地理的、文化的、政治的な境界を跨いで形成する社会的な領域」はトランスナショナル・ソーシャル・フィールド（T.S.F）もしくは「トランスナショナル・コミュニティ」と称するとするものである（Basch, Glick-Schiller, and Blanc 1984: 7）。

ただし、筆者がこの定義を出発点とするのは、この概念にしたがって自らの一連の研究を進めたからではない。むしろ、筆者は、都市エスニシティ研究のなかで、この定義と同様のイメージで「エスニック・ネットワーク」の研究を展開していた（広田 1997; 2003）。だが、当時はそれを「トランスナショナリズム」論とは呼ばず、都市エスニシティ研究の範疇のなかでとらえていた。だが、今は、この定義から生み出された、分析枠組みとしての「トランスナショナル・コミュニティ」概念と相互参照し、この概念に含まれる研究作業上の諸仮説についての検討を意図し、出発点における作業仮説としてこの定義を取り上げる。

無論、「トランスナショナル・コミュニティ」を創り出すトランスナショナリズムの発生要因は多様である。周知のようにR. コーエンは、グローバル・ディアスポラの発生要因として、政治的、経済的、文化的等々の要因にもとづき、政治的ディアスポラ、経済的ディアスポラ、難民ディアスポラ、芸術的ディアスポラが出現することを指摘している（Cohen 1997 = 2001）。A. ボルテスは、プエルトリコとアメリカ合衆国との間のトランスナショナルな繋がりについて、軍事的な関係が発端にな

り、そこに社会的、文化的な繋がりができ、出身地でもあれば目的地でもあるような、そしてその逆でもあるようなコミュニティが出来上がる、歴史的で社会文化的で、軍事的な要因を指摘している (Portes 1989)。また、トランスナショナリズムについても、これが、現代のグローバル化に伴う特有の現象なのかそれとも過去からその相貌を変えつつも継続的に存在したのか、についても議論がある。例えばS.ヴァトベックのように、過去の国際移動と現在の国際移動を比べて、技術的な違いや移動の頻度や難易度の違いはあるにせよ、それは程度の問題であるとする研究者もいる (Vertovec 2009: 18-19)。

だが、「トランスナショナル・コミュニティ」の形成因と国際移動の原因は多様であっても本論では、移動する人々が創りだす多文化、多民族化空間は現実に遍在し、それが社会全体に提起する問題はきわめて重要性をましているという認識を出発点に、「結節点」となる「場所」での否応なしの多文化化、多民族化、「場所」と「場所」を結ぶ越境のネットワークの意味、当該地域における多民族同士の接触と「場所」を巡る競争、闘争、当該国家からの「同化」や「統合」の政治過程と「共生」等々の問題について、あくまでも「場所」やそこに形成されるコミュニティを研究の立脚点として、そして前述の諸研究が現在の研究課題として提起している個人的なレベルでの問題と国家的レベルでの問題の接合、あるいは構造と主体、ミクロとマクロを繋ぐ研究枠組みの構想という要請を背景にしつつ、研究枠組みとしての「トランスナショナル・コミュニティ」概念の可能性について考察していきたい。まず筆者は、ここにどのような研究の諸仮説を見出すことができるか、あくまでも、都市社会学の立場から考察しておきたい。

2.2 「トランスナショナル・コミュニティ」概念が提示する諸仮説と呈示される論点

分析枠組みとして「トランスナショナル・コミュニティ」概念を設定したとき、都市社会学的にはそこに研究上のどのような諸仮説群を見出すことができるか、どのような視点と方法が開けてくるか。下記の三点に絞って考察したい。

1) 仮説1. 「トランスナショナル・コミュニティ」と「場所」 ——「統合」と「共生」研究への新たな視座——

前述のように筆者は、移民トランスナショナリズム論

の嚆矢としてN.グリック・シラーらの定義を当座の出発点とした。再三付け加えるが、筆者がこの定義を出発点とするのは、筆者自身、横浜市鶴見潮田、群馬県大泉町、池袋、新宿等を歩きながら、国境を超えるネットワークを目の当たりにすることができたからであり、この定義を担保する現実との遭遇があったからである (広田 2003)。

この定義及び筆者の調査研究経験を出発点とするとき、「トランスナショナル・コミュニティ」概念が呈示する第一の仮説として筆者は、「トランスナショナル・コミュニティ」は「場所」を持つ、という点を挙げたい。

実体としての「トランスナショナル・コミュニティ」は、複数の、既存の国境を越えた、移動の拠点となる「場所」と「場所」を繋ぎ合わせるネットワークの空間であると同時に、その還流的な移動の磁場となる特定の「場所」に、その姿を顕在化させるという点に改めて着目することは重要である(「場所」の操作的な定義については、3)で触れる)。

この仮説からは、「トランスナショナル・コミュニティ」が国家的な「統合」圧力と切り結ぶ過程への注目をもたらす。「場所」は、出身地コミュニティであれ目的地コミュニティであれ、当然、既存の国家のなかに位置付けられている。越境移動をする人々は、その還流的な移動、高頻度の還流移動をとおして、自らの移動と定住のための諸施設や制度、関係、組織を作り出す。すなわち、初めから領域化をはかるかどうかは別にして、結果としては自らの「場所」を獲得し、コミュニティを形成する。「トランスナショナル・コミュニティ」は、国家を素通りした抽象的な空間に存在するのではなく、また国家の影響を受けない抽象的なコミュニケーション空間ではなく、M. P. スミスが指摘するように出身地であれ目的地であれ当該国家の影響を受けるということである (Smith and Guarnizo, 1999)。

ただ無論、「トランスナショナル・コミュニティ」は、過去の移民コミュニティがそうであったように、同じ民族、エスニシティだけの「閉じた空間」ではない。それは、奥田道大も指摘するように「資本、情報、人の動きの磁場」としての「場所」である (奥田 2004)。そして、「トランスナショナル・コミュニティ」のこの特徴は、個人のレベルでは、P.レビットが言うように、「存在様式 (way of being)」と「所属様式 (way of belonging)」の多様な組み合わせをもたらす (Levitt 2004)。「適応すれども同化せず」という表現が表すように、あ

るいは前出の権が中国朝鮮族に関して指摘するように、「ナショナルリティ」と「エスニシティ」が異なる場合も出てくる。

コミュニティレベルにおいては「トランスナショナル・コミュニティ」の特徴は、出身地コミュニティでもあり目的地コミュニティでもある／あるいはその逆でもある。ここに、当然のことながら、当該国家は、こうした「多様性」「曖昧性」をいかに「統合」するかという問題に直面する。前出の久保山は、ドイツとイギリスを事例に取りつつ「移民抑制政策」から「選別的移民政策」への転換が、グローバル化への対応としての「福祉国家」から「競争国家」へのシフトという国家モデルそのものの転位を背景にし、そうした国家モデルの転位が、「イミグレーションの象徴的政治化」の過程の変化をとおして実現された、と分析している。すなわち、1990年代以前に行われてきた「機能不全の政治的責任」を移民の存在に結びつける政治社会的なメカニズムが、グローバル化への対応のなかで、リスクやコストから資源や能力を重視する移民の「統合」政策への変化する過程として分析している（久保山 2005: 193）。

「統合」の問題は、国家的な「移民政策」という制度上のレベルでは、「正規化対策」といった問題として出現するが、それだけではなく、日常的なレベルでの社会的なモデルとしても形成される。例えば1920年代のアメリカにおいては、初期シカゴ学派的「同化モデル（＝エスニック・サイクル論）」がそうであったように、社会不安を緩和する言説として成立しそれが移民政策の根幹を作ることもある。拙稿で既に述べたように、S. パーソンズは、R. パークの役割として、当時のアメリカ合衆国における「統合」の条件としての英語習得、キリスト教倫理に基づく生活の順守、リベラルな政治体制への賛同等が、都市での定住と市民権の獲得という条件によって自然に達成されるという主張にこそあった、と指摘している（Persons 1987: 60—76）。

日本のように移民政策がとられていない社会においては、コミュニティレベルでの移民の受容や排除に関わる様々な言説が、コミュニティにおける日常の政治特に「共生」をめぐる政治として、国家レベルでの「暗黙の統合」に関わる言説の世界を出現させる。

「共生」の問題については都市社会学の研究蓄積が多い。例えば、「共に住みあう実践・作法」としての「共生」論（奥田道大）、「異質性認識と共振による「共生」」（広田）、「意思決定回路への参加と対等の関係、コミュニケーションの成立による問題解決方法としての

「共生」」（都築くるみ）、「他者性を内部化するロジック」としての「共生」論（山本かほり・松宮朝）等々の多様な研究の展開があるが（広田 2011）、我々は、「トランスナショナル・コミュニティ」という「レンズ」をとおすことで、この多様性と「統合」、そして「共生」の政治に、「統合」の言説と移動主体及び共振主体の受入、乗り越えという問題を必然的に入れて考えなければならない。国家的なレベルでの「統合」と個人の生活レベルあるいはコミュニティのレベルでの「共生」のかかわりを解くミッシング・リングとして、「象徴政治」の概念を分析にもちこむことで、「共生」をめぐる研究に新たな位相を付け加えることができるかもしれない。

分析枠組みとしての「トランスナショナル・コミュニティ」概念をとおすことで、特定の「場所」で繰り広げられる、接触、闘争、共生、アイデンティティの政治を、国家的な制度の問題とリンクさせて考察する手がかりが得られる。

2) 仮説2. 「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理の重層性

——都市コミュニティの編成原理への新たな視座——

都市社会学の立場からするならば、「トランスナショナル・コミュニティ」概念に含まれる、コミュニティ編成原理についての仮説について触れなければならない。

筆者としては、「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理は、ここからあそこへと移り変わるというよりは、幾つもの編成原理の重層する構造をもつと仮定したい。これは何よりも筆者の調査からの経験則であり、トランスナショナリズム論からの理論的帰結でもある。

理論的帰結というのは、「トランスナショナル・コミュニティ」が越境移動者の往還的な移動（または還流的な移動）を一つの条件として形成されているということが理由である。往還的な移動は、メンバーの非固定性をもたらす。だが、メンバーの非固定性は、必ずしも、同コミュニティの凝集性のなさや不安定性を意味するわけではない。メンバーは非固定的でも、コミュニティは厳然と維持されている。

なぜか。「場所」をめぐる競争は結果として新たな「領域」を作り出す。しかしそうした実践は、はじめは、日常的に、既存の制度を脱構築的に利用し、自らの「場所」を獲得する。筆者の著作でも依拠したが、「日常の実践」はM. ド・セルトーによれば「領域化」を図らない実践である。セルトーは「戦略」と「戦術」を区別し、「（戦略とは）意思と権力の主体が周囲の環境から身

を引きはなし、独立を保って始めて可能になるような力関係の計算のこと」とし、「こうした戦略は、おのれに固有のものとして境界線を引けるような一定の場所を前提」としている、と述べ、「(戦術とは) これといって自分に固有のものがあるわけではないのに、…計算をはかること」であると区別している (Certeau 1980 = 1987: 26—27)。そして、「日常実践」とは、「数々のテクニクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の細部にかかわる多数の戦術を駆使してその構造の働き方をそらしてしまうような」実践と定義している (Certeau 1980 = 1987: 18)。セルトーによれば「こうした戦術は、地域の安定性が崩壊してゆくにつれてその数をふやし、そのさまはもはや一定の共同体にしばられることもなく軌道はずれてさまよっているかのよう」と形容している。1990年当時、筆者が、エスニック・ネットワーク概念によって、鶴見の日系ブラジル人のネットワークを描くときは、この概念を使用したか、その時は、日系人にとっては生活条件が全く整わない状況の中で、自らの繋がりにおいて状況を乗り越える生き方が、まさにこうした意味での「日常実践」と呼べる種類の自らの生きる「場所」の獲得実践であったと考えている。

こうしたネットワークは、群馬県大泉町のブラジルタウンの形成や新宿コリア・タウンや池袋の新東京中華街構想といった現在の多文化化・多民族化の進行のなかで、「日常実践」から「領域化」への流れとして消え失せているかということ、必ずしもそうではない。一見すれば消えそうなこの実践は、「場所」の獲得競争のなかでも「領域化」と重なり合って進行しているというのが筆者の見解である。

さらに、「場所」の獲得、「領域化」は、「開放的で、脱領域的な社会的凝集」として立ち現れることもある。ここで言う「脱領域的な社会的凝集」とは何か。特に大都市の移動の「磁場」においては、結節点となる施設や人々、機関、組織等々へのかかわる限りで、かならずしも「居住の近接性に基づかない」集散が繰り返され、そこにある種の「社会的凝集」が成立し、かならずしも定住者がいなくとも一種の「社会的集合」がその場にイメージされることがある (Maffesoli 1988 = 1997)。もちろんこのことは、外部の人々からはその社会的凝集のリーダーがなかなか見えてこないという現実をもたらし、また、「組織」なのか「ネットワーク」なのかあるいは単なる「集まり」なのかについても見えないことが多い。

こうした意味での「場所」と「社会的凝集」の形成

は、必ずしも現代の「トランスナショナル・コミュニティ」のみに見られる一つの現象とばかりは言えない。都市社会学の研究領域においては、都市的世界におけるコミュニティとして、当該の人々にとっては「結節点」を中心に集散する人々の集合、必ずしも「コミュニティ」とは言えない社会的集合に関する研究がある。

初期シカゴ学派の記念すべき第一作目のモノグラフである N.アンダーソンの『ホーボー』の研究のなかに筆者は、そうした社会的集合としてのコミュニティの研究の示唆があると考えている。もちろんアンダーソンの『ホーボー』と現代の移民研究とは違う。アンダーソンによれば、ホーボーとは、厳密な意味では家郷を喪失した『渡り労働者』のことである。彼らは、その時期や季節にはかかわりなく、そして工場や店や鉱山や農場での収穫作業など働けるところならどこでも働く。彼らの仕事場の範囲は全国に及び、さらに多くの場合、国境を越えることもある。ホーボーは、仕事と仕事のあいまいに、物乞いに身をやつすこともあるが、その生活は基本的に労働によって支えられ、その仕事によって彼らはホーボーとしての階層にとどまることができる (Anderson 1923 = 1999: 136)。

だが、年を取って渡り労働が出来なくなった「ホーボー」ならなおのこと、若い「ホーボー」でも特に冬場は、都市に辿り着いて浮浪者、家郷喪失者 (=ホームレス) としての生活をする。アンダーソンの言う「バン」や「ホーム・ガード」とはこういう人々であり、同書では、都市の外で渡り労働をする「ホーボー」たちの労働世界や独特のコミュニケーション世界、彼らの生活ルールや労働者としての組織化の過程、文化・思想的世界について描くだけでなく、もはや労働が出来なくなった人々の住処として簡易宿泊街についても描かれる。

アンダーソンにとって、都市に滞在する時の「ホーボー」の世界を描く拠点になる「場所」が、いわゆる「ホボヘミア」である。「ホボヘミア」とは、公的及び私的な就労斡旋機関、安レストラン、洋品店、床屋、質屋そして一夜を明かす簡易宿泊所、彼らの生活支援をする教会やセツルメントが集まる「メインシステム」と呼ばれる街路 (主にシカゴ市のウエスト・マジソン街) を中心とする「ホーボー」地区のことである。

アンダーソンは、この「ホボヘミア」で、特に雑業にも“あぶれる”冬場で、彼らが何とか生活を維持していく技術—アンダーソンはそれを「切り抜け (getting by)」と呼ぶ—や、彼らの知的生活—「ホーボー大学」—や、彼らの労働組織や新聞などの制度形成とそれが抱

える課題を記述し分析する。その記述の仕方は、アンダーソン自身の「経験」も踏まえ、ふんだんな「事例」を織り交ぜながらエスノグラフィックな手法でなされている。

繰り返すが現代の移民とアンダーソンのホーボーとは異なる。だが、結節点を起点にした必ずしも居住の近接性を条件としない集合としてのコミュニティ研究は都市社会学の初発の時点から存在したと筆者は考える。

さらに「場所」の獲得は、かならずしも既存の住民と対立するわけではないということも指摘しなければならない。一方では、「共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして、結びあう生成の居住世界としての都市的世界」(奥田道大)として立ち現れることもある。

我々は、領域化と領域化を図らない「場所」の使用や占有、そしてそこでのアイデンティティ・ポリティクスを展開を見ていく必要がある。だが、その際我々は、当該の「トランスナショナル・コミュニティ」がどのような形での編成、結合原理を重層させているかを見る必要がある。

3) 仮説3. 「トランスナショナル・コミュニティ」と推移空間化

——「下からの」都市空間形成過程への視座——

仮説の第三は、「トランスナショナル・コミュニティ」の形成過程は、特に大都市においては中心部に隣接する空間につくられ、同地域をさらに推移空間化し、「トランスナショナル・コミュニティ」自体が遷移過程のなかに置かれるということである。

推移空間とは周知のように、初期シカゴ学派の E. W. バージェスの用語である。バーージェスによれば、都市の発展の過程において、拡大する中心市街地に隣接する地域は、拡大へと向かう力が働くことによる空間利用の変化に晒され、土地所有者は、近い将来の土地利用を見越して建物の老朽化には目をつぶる。その結果、1910年代、20年代の移民たちは、この地域に、それぞれの移民コミュニティを形成した。

だが我々は、推移空間は老朽化した空間であると同時に、活気に満ちた空間であることを忘れてはならない。バーージェスによればそこは「本質的には、墮落し、停滞し、衰退しつつある人々のいる地域であるけれど、伝道団体やセトルメントや芸術家のコロニーや過激派のセンターなど——どれもみな、新しい、より良い世界のヴィジョンにとりつかれている——が証拠立てているように、再生の地域」である (Burgess 1925 = 2011)。

推移空間は、もちろん、資本、国家、行政による「領域化」が進行する地域であるが、しかし同時に推移という条件は、セルトーの言葉を借りれば、「日常実践」にもとづく「下からの」制度形成、空間形成が展開する条件を備えた地域でもある。周知のように初期シカゴ学派のヒューズの研究や前述の大倉の不動産業に焦点をあてた研究は、その展開を採ったものである。

ただし、「下からの」制度形成過程は、不動産業の役割だけではない。われわれは、侵入、継承、遷移の過程のなかに、どのような制度やコミュニティや社会的集合が形成されていくかを見守る必要がある。

特に現段階での「トランスナショナル・コミュニティ」においては、必然的に差異を前提にした「共生のポリティクス」とでも言うべき問題を提起せざるを得ない。それは遷推空間化する過程での、いわば、(日本人を含めた)それぞれの「場所の獲得」競争として現れる。「場所」の定義については別稿で展開せざるを得ないが、筆者は必ずしも「場所」を個人的につくられるものとも、社会の空間構造の一つの次元であるとも考えない。確たる領域化が行われなくとも、そこに流入する人々の制度が形成され、何らかの領域意識が醸成され、それを示す何らかの集团的(あるいは集合的)な象徴的秩序やアイデンティティが付与されるとき、そこは自分たちの「場所」として認識され、同時に社会の空間構造の一部として位置づけられる。「場所」は個人の日常実践と制度化された空間とが踵を接する場である。本稿では「トランスナショナル・コミュニティ」の諸仮説に関する考察を背景に、とりあえず操作的にこのように定義しておきたい。

この問題は、さらに、場所の獲得、領域化、場所の政治といった過程のなかで、改めて古くて新しい「同化」「統合」「インコーポレーション」と「場所」の獲得の、日本的なあり方についての問題につながることも指摘しておきたい。

「インコーポレーション」に関する研究位相は、日本の都市エスニシティ論においては繰り返し経験的な調査報告がなされてきた分野であり、筆者も同様に断続的ではあるが経験調査を続けている。さらにこの領域は、言うまでもなくアメリカにおける移民研究において最も蓄積が多い領域であり、例えば1920年代初期シカゴ学派の R. パークの同化論に始まり、近年の R. アルバラのインコーポレーション論(同化論、分節的同化論を含む)等の研究が目白押しである(広田 2005)。

ただ、本稿では、「トランスナショナル・コミュニティ

ィ」仮説2の「場所」の獲得の問題と併せて、筆者は、日本人のグラスルーツ・トランスナショナルリズムの本質として、歴史的な研究も必要であることを指摘しておきたい。

3. 「トランスナショナル・コミュニティ」概念の諸仮説と調査諸論文との関係 ——一つの研究世界の構成を目指して——

「トランスナショナル・コミュニティ」に関する以上の三つの仮説と分析の論点は、いくつかのフィールド現場で実施した筆者の調査研究から提起されたものでもあり、またその調査に影響を及ぼしている。最後に筆者が行ったいくつかの調査論文とこの三つの仮説との繋がりについて述べておきたい。

順序は逆だが、まず、仮説3で提起された「トランスナショナル・コミュニティ」と「推移空間化」との関係性について述べておきたい。この問題への注目は、特に大都市における移動の磁場に形成されるエスニック・コミュニティにおいて、日本人の「場所」の獲得と「下からの」都市空間形成の諸特徴を浮かび上がらせることができる。例えば、時代と場所を異にするとはいえ、1910年代のシカゴへのヨーロッパ移民が推移地帯にコミュニティを作ったと同じ時代に布哇に移民した日本人も、ホノルルにおいては、推移地帯にあたるアアラ街とカアアコに自らの「場所」を獲得しコミュニティを形成した。さらに現代においても、新宿、池袋等に形成されている「トランスナショナル・コミュニティ」としてのコリア・タウンやイスラム・スポットといわれる地域も、新宿西口の中心ビジネス地帯に隣接する空間（大久保通り文化通り）に形成されており、職安通りに銀行や大手のレストラン、雑貨店、スーパーや病院等の施設が出来上がるにつれて、日本人相手の雑貨店やブティック等の多くの商店は、大久保通りと職安通りを結ぶ細街路に集中し、それに伴い、同地域に店を構えていたムスリム相手のハラルフード店やレストランは、文化通りに「場所」を移し、その周囲に大きなチャイナタウンが「場所」を形成した（この調査報告及び布哇ホノルル・アアラ街に関する報告については後述する）。

こうしたそれぞれの「場所」の獲得過程は、資本による上からの空間形成とは異なり、例えばある時まで日本人のアパートであった部屋に、いきなり、ハンダが書かれ、韓国系や中国系の人々のオフィスになるという「下からの」空間形成を展開している。

その「場所」の獲得は、日常の関係性の形成はある

が、組織的なものではない。筆者が2012年度社会調査実習の授業の事前調査でインタビューをした新宿大久保のコリアタウンの通称「イケメン通り」でブティックを営んでいるある人物によれば、「この小さな店を出しているオーナーはほとんど顔見知りではない」と断言している。

前述のように、推移空間は、もちろん、資本、国家、行政による「領域化」が進行する地域であるが、しかし同時に推移という条件は、セルトーの言葉を借りれば、「日常の実践」にもとづく「下からの」制度形成、空間形成が展開する条件を備えた地域でもある。われわれは、日常的に行われる「侵入」「継承」「遷移」の過程を追う中で、ここにどのような集合や制度や「コミュニティ」が形成されていくかを見守る必要がある。

仮説2の、「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理の重層性については、筆者は、明治後期の周防大島及び沖家室島からの初期移民—筆者はこれを「初期トランスナショナルリズム」という表現を用いた—の布哇ホノルルでの移民ネットワーク、コミュニティ形成及び「共生」の問題として「越境の都市的世界と場所への繋がり、場所の獲得」（広田2012b）としてその一端を描いた。

同調査においては、『かむろ』という沖家室（おきかむろ）島在住者が、布哇や台湾や朝鮮半島や中国への移動者たちの消息を掲載した雑誌を中心に結ばれ、そうした場所とのトランスナショナルな繋がりを背景に、ホノルルの都市推移地帯に、いかに自らのコミュニティや職業団体を作り、フィリピン人その他の移動者を巻き込んでアメリカ合衆国からの同化政策のなかで「共生」を図ったかについて、拙いながら、そしてまだ補足が必要なが調査報告を書いた。ここでは、国家施策としての移民奨励の社会的雰囲気の中で移動し、初めは日常の実践によりネットワークを形成し、次第に、「アアラ街」という場所を獲得し、「領域化」を図る過程を描いた。日本人の初期トランスナショナルリズムの展開は、時代背景としては、まさに初期シカゴ学派の時代と遭遇する。

結節点を介した、必ずしも居住の近接性に基づかない集散と社会的集合としての「トランスナショナル・コミュニティ」に関しては、現在の新宿コリアン・タウンやイスラム・スポットではよく見られる現象である。この点については、前述のようにその一部を近日中に『社会調査実習報告書』として纏める予定であるが、例えば、コミュニティ形成の重層性は、「トランスナショナル・コミュニティ」に関わる人々の多様性としても現れ

る。前述の通称「イケメン通り」でブティックをしている人物は、日本人と結婚し、日本人の中で生活をしており、また、筆者がインタビューをした、大久保通りと上記細街路との角にある雑貨店の二階のレストランを営んでいる女性は日本の大学を出ていたが、しかし、まったく日本語を話さず韓国人世界のなかで生活をしている人も多い。彼らと「場所」をめぐる政治に関わる日本人住民を含めてそれぞれの「場所」が混在しているのが現状である。

結節点を介した、必ずしも居住の近接性に基づかない集散と社会的集合としての「トランスナショナル・コミュニティ」としての側面としては、前述のイスラム・スポットがある。筆者もインタビューをした「文化通り」の、ある商店会長は、モスクとハラルフード店が集中しているため、金曜日にはムスリム住民が集まるが、必ずしも彼らが居住しているわけではないため、日本の商慣習になじまないこと、相手の顔が見えないので話し合いの余地がないことを主張している。

実際、コミュニティ形成の多層性は、ハラルフードに関わる経営者、そして文化通りに社屋をおく送金業者、教会、そしてモスクに礼拝に来てはハラルフードを購入する移動主体、上記の日本人商店主たちの組織とはまったくすれ違う。モスクを管理するインド出身のハラルフード経営者は、群馬県に家族とハラルフードの店を持ち、通勤する関係者である。本人は、「自分は宗教上のリーダーかもしれないが、世俗のリーダーではない。しかし大久保は自分にとっては特別の場所である」と筆者には発言している。これ以外のハラルフードの経営者は、必ずしも、彼をリーダーとは思っていない節もある。それぞれの目的に応じて、混淆して関わるといのが現状である。

仮説1の「統合と共生」との関係性については、確かに「共生」の位相変化を伴いながら、いくつかの現場で「象徴政治」が展開している。仮説1で指摘した、統合に関する社会的な言説が、共生を巡る政治として、自治体の制度的なレベルでの問題に影響を及ぼす可能性については、筆者の「トランスナショナリズムと場所の政治」(広田 2010) とその後の補足調査において検討をした。本論は、群馬県大泉町で行われた日系ブラジル人の受容と共生をめぐる施策と言説の変化、言説の変化と選挙との関係、そしてこうした言説のなかでブラジルタウンの建設にいたる移動主体と共振する地元観光協会や商工会の動きまでを扱ったもので、コミュニティレベルでの移民の受容や排除に関わる様々な言説が、コミュニテ

ィレベルにおける日常の政治特に「共生」をめぐる政治として、国家レベルでの「暗黙の統合」に関わる言説の世界を出現させる。まさに、コミュニティレベルでの移民の受容や排除に関わる様々な言説が、コミュニティレベルにおける日常の政治特に「共生」をめぐる政治として、国家レベルでの「暗黙の統合」に関わる言説の世界を出現させた例といえる。

最後になるが、こうした研究がなぜ都市社会学の領域から展開してきたのかについては、前述のように「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」(広田 2012a) において都市コミュニティ論の展開と「下からの」コミュニティ形成研究の展開という文脈で報告している。

4. 終わりに

本論は、「トランスナショナル・コミュニティ」概念を研究枠組みとして、日本社会の移動の磁場に形成されるそれぞれの「場所」や、多文化、多民族コミュニティの編成原理及び日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムを研究する際の諸前提、諸仮説を明らかにすることを意図している。「トランスナショナル・コミュニティ」概念に内在する諸仮説に目を向けることで、われわれは都市コミュニティ研究の新たな領域を開拓できると考える。

最後に、「場所」とは、移民の境界侵食過程が、政治的、文化的な境界を越える時に引き起こす様々な差異がぶつかる場であることについても付け加えておきたい。

文献

- Anderson, N., 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homelessmen*, The University of Chicago Press. (=1999, 2000, 広田康生訳『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学(上・下)』奥田道大・吉原直樹監修、ハーベスト社.)
- Basch, L. G., Glick-Schiller, N., and Blanc, S., 1984, *Nations Unbound*, Gordon and Breach.
- Burgess, E., 1925, *The Growth of the City*. (=2011, 松本康訳「都市の成長——長期プロジェクト序説」松本康編『都市社会学セレクション1 近代アーバニズム』日本評論社.)
- Certeau, M., 1980, *Art de Faire*. (=1987, 山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社.)
- Cohen, R., 1997, *Global Diaspora*, UCL Press. (=2001, 駒井洋監訳・角谷多佳子訳『グローバル・ディアスポラ』明石書店.)
- 藤原法子, 2008, 『トランスローカル・コミュニティ』ハーベスト社.

- 広田康生, 1997, 『エスニシティと都市』 有信堂.
- 広田康生, 2003, 『エスニシティと都市 (新版)』 有信堂.
- 広田康生, 2005, 「同化研究の論理とトランスナショナリズム論」『専修人文論集』 第76号.
- 広田康生, 2006, 「テーマ別研究動向 (移民研究)」『社会学評論』 57 (3).
- 広田康生, 2010, 「トランスナショナリズムと場所の政治」『専修人文論集』 第86号.
- 広田康生, 2011, 「『共生』論と初期シカゴ学派エスニシティ研究」『専修人間科学論集 社会学篇』 Vol. 2, No. 2.
- 広田康生, 2012a, 「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所への都市社会学的接近」『専修人間科学論集 社会学篇』 Vol. 2, No. 2.
- 広田康生, 2012b, 「越境の都市的世界と場所への繋がり、場所の獲得—沖家室とホノルル・アアラ及びカカアコの越境者たち」『専修大学人文科学研究月報』 第255号.
- 小井土彰宏, 2008, 「岐路に立つアメリカ合衆国の移民政策—増大する移民と規制レジームの多重的再編過程」駒井洋監修・小井土彰宏編『講座 グローバル化する日本と移民問題 3 移民政策の国際比較』 明石書店.
- 近藤敦・塩原良和・鈴木江理子, 2008, 『非正規化滞在者と在留特別許可—移住者たちの過去、現在、未来』 日本評論社.
- 権香淑, 2011, 『移動する朝鮮族—エスニック・マイノリティの自己統治』 彩流社.
- 久保山亮, 2005, 「欧州諸国における移民政策と国内政治—イギリスとドイツの中道左派政権下での移民政策の構造転換」山口二郎・宮本太郎・小川有美編『市民社会民主主義への挑戦』 日本経済評論社.
- 久保山亮, 2010, 「5つの滞在正規化レジーム—ヨーロッパ15ヶ国とEUの非正規滞在者への正規化対策の比較」近藤敦・塩原良和・鈴木江理子『非正規化滞在者と在留特別許可—移住者たちの過去、現在、未来』 日本評論社.
- Levitt, P., 2004, “Conceptualizing Simultaneity: A Transnational Social Field Perspective on Society,” *I.M.R.*, Vol. 38, No. 3.
- Maffesoli, M., 1988, *Le Temps des Tribus*. (=1997, 古田幸男訳『小集団の時代』 法政大学出版局.)
- 大倉健宏, 2012a, 『エッジワイズなコミュニティ』 ハーベスト社. 奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場』 東京大学出版会.
- 大倉健宏, 2012b, 「エッジワイズなコミュニティ—外国人住民による不動産取得をめぐるトランスナショナル・コミュニティの存在形態」日本都市社会学会第30回大会自由報告第一部会提出レジュメ.
- 奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場』 東京大学出版会. 奥田道大, 2009, 『人々にとって「都市的なるもの」とは』 ハーベスト社.
- Parsons, S., 1987, *Ethnic Studies at Chicago, 1905–1945*, University of Illinois Press.
- Portes, A., 1989, “Contemporary Immigration,” *I.M.R.*, Vol. 23, No. 3.
- Smith, M. P. and Guarnizo, L. E., 1999, *Transnationalism for Below*, Transaction Publishers.
- 田嶋淳子, 2010, 『国際移住の社会学』 明石書店.
- 谷富夫, 2012, 「都市とエスニシティ—人口減少社会の入り口に立って」第30回日本都市社会学会大会シンポジウム・レジュメ.
- Vertovec, S., 2009, *Transnationalism*, Routledge.
- 渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編, 2003, 『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』 明石書店.